コンプティーク7月号特別付録

CandyStripe
キャラクター ストーリーブック

外伝作者：神戸虎吉

キャンディストライプ
Candy Stripe
～みならい天使～

元気で明るく純情な性格の女の子。
努力家でいつも
笑顔を絶やさないところ
などはまさに看護婦向き。
でも、強情で
頑固という一面も。
晋太という弟が
聖アンジェルス病院に
入院している。

看護学生の綾乃が看護婦と
しても人間としても
どう成長していくのかが、
ゲーム本編のみどころだぞ。
主人公との出会いは
まだ……秘密!

P u r e

森崎綾乃

CV：長崎みなみ

AYANO MORISAKI

PROFILE

職　業：看護婦
性　別：女性
身　長：162cm
サイズ：B81 W58 H82
誕生日：3月9日
星　座：魚座
血液型：A

まだ夏の匂いを残した風が優しく頬をなでる。
その日二人は、なだらかな芝生の上で、ゆっくりと流れる雲を見上げていた。
この公園は病院のほど近くにあり、木立に囲まれたプロムナードや、芝生の丘陵といった設備がある。
街中でこれだけの緑を有しているところは珍しくて、近辺に住む人々だけでなく、通勤や通学の人々にとっても憩いの場であった。
ましてや、普段味気の無い空間にいる患者にとっては、なおさら強く感じられる所であるため、外出許可を取ってこの公園に来る者が多かった。
「いいお天気ね…」
「うん…」
今日何度目かの言葉が、綾乃と晋太の口から順に発せられる。
「風に混じって、鳥の声も聞こえるね」
「そうね…」
晋太は自然の物音を、耳だけでなく全身を使って聴いているようだった。
綾乃は以前から、休日に弟を連れてこの公園に来ようと思っていた。
しかし病院側は晋太の体調を心配して、少なくとももう一人付き添いがいたほうがよいと考えていた。
だがあまり大勢だと、二人にとって休日にはならない。また少なくても、いかつい医師と一緒に機材を持って行くようだと、晋太にとって気持ちの良い物ではないし、何かと忙しい医師を連れ出せるわけがない。
すると、彼がその役をかってくれた。もともと彼は、晋太の担当医の一人であったからだ。
しかし綾乃は、付き添いの話が出たときから、彼に頼むつもりだった。
建前としては先の理由もあるが、本当のところ、綾乃自身もはっきりとは解らなかった。
「先生…、ちゃんと来るかなぁ～?」
「来るわよ、きっと…」
太陽はもうすぐ真上に差し掛かろうとしていた。
晋太は自然の空気を存分に楽しんでいた様子だが、やはり彼がいないことが不満らしい。
お腹もへってきているのだろう。
「先生が来ないと、お姉ちゃんの弁当食べられないもんな～」
綾乃は晋太の車椅子を押しながら、ここまでやってきた。
そのため綾乃が作ったお弁当は、彼が持ってくる事になった。
せっかくだから、青空の下で姉の作った料理を食べたい。
（ふふふ…やっぱり、あの人のこと頼りにしているんだわ…、この頃、本当の兄弟みたいだものね…）

AYANO's Side Story

晴れた日に公園で…

ゲーム本編では語られない綾乃と主人公の外伝をいち早く紹介!　もちろん、原稿は本編と同じシナリオライターの筆だぞ!!

今、公園に来ているのは二人だけ。
彼も当然この日に準備していたのが、朝になって急に医院長の頼み事が入り、病院に行っている。
二人は中止にしようかと言ったが、彼の方から、君達の方が楽しみにしていた事だと主張して、用事が終わったらすぐ向かうからと約束して行った。
だから、二人が雲を眺めていたのは、景色や気分を楽しんでいた外に、暇だったことも理由の一つだろう。

ゆったりとした時間が流れる。
やがて綾乃は、晋太が静かになったので、寝てしまったのかと思った。
そして綾乃自身も、風の心地よさに誘われて、ついウトウトと居眠りをはじめていた。
そのとき。
「なあ…、お姉ちゃん…」
「えっ…なに?」
「ごめん、寝てた?」
綾乃は少しあわてて、意識を整えながら晋太に向き直る。
「ううん…大丈夫、どうしたの、何か言った?」
「いや…、先生…遅いね」
「そんなに心配しなくても、もうすぐ来るわよ」
「うん…」

晋太が何か考え事をしているのがわかる。
(そんなに気になっているのかしら…?)
太陽はちょうど二人の真上にあった。
再びゆったりとした時間が流れようとしたとき綾乃の携帯電話の着信音が鳴った。
♪〜…
「お姉ちゃん、電話鳴ってるよ…」
「…………」
綾乃の返事はない。
「お姉ちゃん!?」
「え!　あ、ごめんなさい」
綾乃はあわてて電話に出る。
先ほどのように眠ってしまっていたらしい。
彼からの電話だ。
用件が済み、今からそちらに向かうという。
「先生、今から来るって、ほら…大丈夫じゃない」
綾乃は芝生の広場にいることを彼に伝え、電話を切りながら弟に報告する。しかし隣にいるので、会話の内容は伝わったはずだ。
「そう…」
晋太は生返事をした、まだ何か考え事をしているらしい。
「どうする、あそこに移っておく?」
綾乃は近くに見える屋根のある休息所まで、移動するかどうかを晋太に尋ねた。
「いいよ、まだここで、もうちょっとここに寝ていたい」
「わかったわ…」

綾乃も再び空を見上げる。今度は居眠りをしないつもりだった。
回りの音を聞き流しつつ、考え事をはじめた。
彼のことだ。
彼には晋太の事でお世話になっている。
いずれ彼は研修が終わったら、この病院を去るかもしれない。
それは綾乃自身も正看護婦になったとき、いくら附属とはいえ、このままアンジェルス病院に就職出来るとは限らない。
また、弟の様態は今現在良好なのだが、今後のことを考えて他の病院に移るかもしれない。
すると私は晋太についていった方がよいのだろうか?
もちろん晋太が元気になってくれる事が一番だが、彼とはこの後どうなるのだろう。
この気持ちは…、この不安な気持ちは何なのだろうと。

「なあ…、お姉ちゃん…」
三度、晋太が綾乃を呼びかけた。
「はい、どうしたの?」
綾乃はとりあえず、今は弟のことを優先にしようと思った。
それは逃げであったのかもしれない。
「先生のこと、どう思う?」
「えっ!　ど…どうって?」

綾乃は質問の意味がわからず聞き返していた。
「お姉ちゃん…、今日も信じていたよね」
「それは…、だって」
「先生さ…、お姉ちゃんのこと好きかもしれないよ」
「え…！」
綾乃は驚いた。
彼女自身が、答えを先送りにしようと思っていた事を、弟は聞いてきた。
綾乃は戸惑っていた。
「な、なに、そんなことどうしてわかるの？」
「ううん、何となく…」
晋太は続けて言った。
「お姉ちゃんは、先生の事…好き？」
「…………」
綾乃は答えられなかった。
晋太はさらに続ける。
「僕…、あの先生だったら、お姉ちゃん取られてもいいよ」
「な、な…何を言い出すのよ、あんたは…」
綾乃は顔が真っ赤だった。
あまりにも直接な言い方だったため、何を話していいのか解らなくなったのだ。
「あ、あなたは…そんなこと、気にしなくていいのよ…」
目が泳いだままなので、説教にもならない。
「もう、お弁当…あげないわよ！」
それだけ言うのがやっとだった。
「お姉ちゃん、もっとゆっくり考えなよ」
晋太がにやにやしながら話す。
こういう顔は、姉をからかっている時の顔だ。
「晋太…、私をからかっているのね」
「ははは…」
綾乃はさらに顔を真っ赤にして言う。
晋太にはそれがとてもおかしいらしく、ずっと笑っている。

「お〜〜い…」
ちょうどその彼が、林を抜けて芝生の広場に現れたのが見えた。
背中にリュックと、両手にビニール袋をぶら下げている。
太陽は少し西に傾いていた。

無邪気で威勢が良く、かなりドジな
一面を持つ女の子。
口数が多い反面、本当は臆病で
落ち着きがない性格。
かなりいい家柄の
お嬢さまとの噂も!?

そんな一見、看護婦には
不向きに見える栄美子が、
どんな出会いをして
どんな経験を積み、そして
どんな看護婦に成長
していくかが
栄美子ストーリーの
みどころだぞ!

Innocent

園田栄美子

CV：和田カヨ

EMIKO SONODA

PROFILE

職　業：看護婦
性　別：女性
身　長：154cm
サイズ：B79 W56 H80
誕生日：2月4日
星　座：水瓶座
血液型：AB

EMIKO's Side Story

深夜の見回り

栄美子の深夜の見回りを描いた外伝小説。綾乃と希のイタズラの結末は？　もちろん、コンプでしか読めないオリジナルだぞ!

コツ…コツ…コツ…

「う～っ…、綾ちゃんも希さんも…、みんなどこに行っちゃったんだよ～」

栄美子は一人、薄暗がりの廊下を歩いていた。

つい先刻までナースステーションには、親友である綾乃と、今現在自分達の担当である看護婦の希が一緒にいたのだが、綾乃は深夜の見回りに出ていってしまい、希はいつもの様にふらりとどこかへいってしまい、彼女一人でナースステーションにいたのだった。

「こんな時にナースコールが鳴るなんて反則だよ、しかも一番遠い部屋だなんて…」

ナースステーションにいたときは、明るいので何でもなかったのだが、今は深夜のため、病室はもちろん廊下でもいくつかの非常灯と非常口案内がついているだけである。懐中電灯は前方を照らすだけで、それ以外は当然のように薄暗い。

「も～っ…綾ちゃんはどこら辺にいるのかな？　近くにいてくれるといいんだけど…」

ピチャ～ン！

「ひっ」

カランカラン…コロロロロ…

驚いた栄美子は、思わず懐中電灯を落としてしまった。

「あ！」

唯一の頼りである明かりは、無情にもコロコロと遠くへいってしまう。

そのまま曲がり角の影にでも行ってしまったのだろうか、途端に栄美子の回りは、薄暗い闇だけになってしまう。

「うわ～ん…！、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい………」

栄美子はぎゅっと目を閉じて耳をふさぎ、そのままうずくまってしまった。

すると。

「はい…」

誰かの声が聞こえたような気がして、何かが足下に転がり、ナースシューズにあたる感覚がする。

びくっと身体を震わせた栄美子だったが、おそるおそる目を開くと足下が一部明るくなっている。

見るとさっき落として転がってしまった懐中電灯が、目の前に置いてあった。

急いで懐中電灯を拾うと、栄美子は廊下の先を照らした。すると何かに光が当たり、スーッと人影が動いた気配がする。

「綾ちゃん？　綾ちゃんでしょ…」

「も～っ、冗談はやめてよ～っ、コールがあったんだからね、手伝ってよ～っ」

「…………」

返事はない。

「いいやもう…、綾ちゃんなんて知らない」

栄美子は半分泣きそうながら、やけになり立ち上がる。

よく注意するとさっきの音は、近くにある

の水道の蛇口から、水が垂れていただけだった。
　蛇口を固く締め直し、再び歩き出す栄美子。
　本当はもうナースステーションでおとなしくしていたかったが、いくら学生といっても看護婦としての仕事を放棄するわけにもいかず、呪文のように唱えながら廊下を進む。
「う～っ…、だいじょぶだいじょぶ…、恐くない恐くない…」
　ようやく病室の前にたどり着いた。ナースコールがあってから5分とは経っていないだろうが、今の栄美子にとっては何百倍にも感じた。
　ガラララ…
「も…もしもし～、どうかしましたか～？」
　ようやく呼ばれた病室についた栄美子は、病室の引き戸を開け、弱々しくしかもおそるおそる声を掛けた。
　病室はたしか4人部屋なので、部屋の電気をつけるわけにはいかない。
「あ～う…、うう…」
　すると手前のベッドからうなり声が聞こえてきた。ビクッと身体を震わせた栄美子は、何も言えないままとっさに懐中電灯の光を、声がしたベッドの方に向ける。
「な、な…な、なんですか～？　どうかし…」
　ガラララッツ！　バタンッ！！
　白く丸まっているものが見えたかと思うと、突然病室の入口がしまった。
「ひっ！」
　びくっとして入口を振り返ったとたん。
「おおおおお……」
　ベッドの上のそれは、いきなり起きあがって栄美子に向かって来た。
「××××××……！」
　栄美子の絶叫がこだまする。

。　。　。

「あははは…！　あの声あの驚きよう、すごかったね～」
　お腹を抱え、涙まで流して笑っている希。
「ごめんね栄美子ちゃん…、まさかこんなにうまくいくなんて思わなかったから…」
　笑いを堪えつつも、申し訳なさそうに謝る綾乃。
「もお～っ、ひっど～い！」
「栄美子ホントにホントにホントに、びっくりしたんだからっつ！」
　先ほどの病室だが今度はちゃんと明かりがついている。
「でも気がつかなかったのおかしいって…、この区画は先日から空きになったんだって、言ってたじゃない」
「そんなこと考える暇なんて無かったもんっ!!」
「希さん、やっぱりやりすぎたのでは…」
「うう…、綾ちゃんまでこんなコトするなんて…」
「ああ…あのね栄美子ちゃん…」

「あははは……」
希は本当に面白かったらしく笑い続けている。栄美子はずっと怒ったままだ。綾乃だけが二人の間に入り、希をたしなめつつ、栄美子をなだめている。
「んでさっきはさ、懐中電灯拾ってくれたのに行っちゃったでしょ！」
「なに…それ？」
「えっ！　だってさっき、廊下で落としたときに…」
顔を見合わせる綾乃と希。２人以上に不思議そうな顔をする栄美子。
「私じゃ…ないよ、栄美子ちゃん　希さんとここにいたもの…」
「栄美子ちゃん、今度は私たちを騙そうったってそうはいかないわよ」
「えじゃ、患者さん？」
「だから、この区画は患者さんいないよ、先日亡くなったんだから…」
「…………」
「きゃ〜〜〜〜〜っ！！！」
病棟に三者三様の悲鳴がこだました。

はねっかえりのじゃじゃ馬娘で、
ちょっと自信過剰気味な
ところがある女の子
明るく、人懐っこい性格で、
誰とでもすぐ友だちになれる
特技の持ち主。
世話好きで面倒見がよく、
積極的に行動するところは
看護婦の適性があると
いえるかもしれない。
そんな潤も病院の中でさまざまな
出来事に遭遇し、
一人前の看護婦になっていく。

Flapper

梶山潤

CV：清水香里

JUN KAJIYAMA

P R O F I L E

職　業：看護婦
性　別：女性
身　長：156cm
サイズ：B78 W56 H79
誕生日：8月3日
星　座：獅子座
血液型：B

JUN's Side Story

ド・ン・カ・ン

潤と由紀と主人公がスポーツジムに出かけたお話。この外伝を読んで、「CandyStripe」のイメージを膨らませておこう!

休日。

久しぶりにスポーツジムに来ていた。

正確には、2人以上で来たのが久しぶりということだ。

先日…思い切って、あの人を誘ってみた。と言うより、強引に連れてきたって方が正しい…。

ちょうど仕事の合間で、くつろいでいるところを見かけた。

あの人が「たまには身体を動かないとね」って言ってたのが聞こえたから…、ボクが「じゃあ、今度スカッシュしに行こう！」って、突然会話に参加したら、あの人は驚いたけど…「いいね」って言ってくれた。

そのあとボクはひとしきり喜んでから、あの人が誰かと話の途中だった事に気がついて、ちょっと…恥ずかしかった。

でも…二人で来ていたら、間が持たなかったかもしれない。

「はぁ～っ…、やっぱり、あたらないですぅ～」

大河原先生はいつもの調子とかわらなかった。

「大河原先生、でもだんだん動き良くなってきてますよ、もう少しですね」

「はぁ～、そ…、そうなんですかねぇ…」

あの人は優しい…。

ボクが、あの人の事を気にしだしたのは、はじめ雰囲気が兄貴に似ていたからだった。

外見だけじゃなく、ちょっとした仕草、時々みせる真剣な眼差しとか…、何となく頼りないところもそっくり。

でも、それ以上に…。

「梶山さ～ん、交代ですぅ…」

大河原先生はそう言って、こっちにやってくる。

「お疲れさま、先生」

ボクは隣のイスに座ろうとする大河原先生に、タオルとドリンクを取って渡してあげる。

「あ…、ありがとうございます…」

「先生、ボールを目で追うだけじゃなくて、身体を持って行かなきゃ」

「は～い…、今日は、梶山さんの方が先生ですね…」

大河原先生はほわっとした笑顔を向け、イスに座ってからゆっくりと息を整えながらメガネを直す。

「梶山さん交代だよ、こんどは真剣勝負しよう」

あの人から声がかかる。

「いいよ、今度は手加減しないよ！」

ボクはラケットを持って立ち上がった。

「は～、すごかったですね～、見ていて目がグルグル回ってしまいました…」

大河原先生の場合、この言葉は冗談じゃないだろう。

勝負は長いラリーになった。惜しいところまで行ったけど、ちょっとミスがあってボクの負けだ。
スカッシュの経験は無かったって言ってたくせに、上達は早い。見た目と違って体力もある。
「いや〜ぁ…、やっぱり梶山さんは、通ってるだけあるよ」
一度息を継いで言う。
「ホントはついていくのがやっとさ…、あそこで君がスリップしなければ、負けてるのは僕のほうだよ」
そう言ってイスの方にタオルを取りに行く。
「う〜うん…、やっぱり先生才能あるよ、このまま通い続けたら？」
ボクは床に座ったままで言った。
本気でそう思っていた。一緒にジムに通えたらって、願いもこめて…。
「あ、すみません…飲み物無くなってますね…、あたし、買ってきておけばよかったです、ちょっと、急いで行って来ま〜す」
「あ、すみません大河原先生」
それでも大河原先生は、ゆっくりとした動作で歩いていく。
それを見送りながら、ボクは額の汗をぬぐう。
今は…、この空間にあの人と二人だけしかいない…。
そんなことを考えながら、ボクはゆっくり立ち上がった。
大河原先生には悪いけど、我慢できないから水でも飲みに行こうと思った。
それは、のどの渇きのせいだけじゃなかったけど…。
「あ、梶山さん、ちょっと！」
「え、先生？」
「ちょっと目つぶって、そのまま…」
「は、はい」
(え？　な、なに？　どうするの)
ボクはそのまま直立していた。というより動けなかった。
すると先生の手が、ボクの頬に触れる。右頬ってことは、先生の左手だ。
「どうしたの？　せ…」
「だめ、喋っちゃ…」
(わ！　なんだよ…、いきなり、そんな…)
ボクは自分の心臓がドキドキしていくのがわかった。顔が熱くなっていくのも感じた。
えっと…、こういう心拍が急に上がった時って何て言ったっけ…。
この前試験に出たんだけど…たしか…、いやぁ〜あ…、そんなんじゃなくて…。
ボクは…何が起こるか全然わからなくなった。
いや、ちょっと期待していた。
きっと、すっごく顔が赤くなっていただろう。
ゴクッ
しまった！　思わずつばを飲み込んでしまった。
大きな音がしたはずだ、恥ずかしい。
さらに汗が出るのがわかる。
顔だけじゃなくて手の平にも…いや、全身に汗が出るのがわかる。熱い。
手に力が入らない、抱えたラケットが落ちそうだ。
でも持ち直している暇なんてない。
目をつぶっていても、顔の前面に何か影が

被さるのがわかる。
（うわ！　くる…）
ここはいつものスポーツジム。
スカッシュ用の壁に囲まれた空間。
一方はガラス張りだけど…、まだ大河原先生は帰ってこないみたいだ。
でも見られたらどうするの？
もっと違うところで、と思ってたんだけど…、もうわからない、自然と唇が突き出てくる。
（お…、お兄ちゃん！）
バフッツ！
と、突然顔に布のようなものがあてられ、そのままグリグリと押しつけられる。
「わ！」
あわてて振り払おうとするが、今度は後頭部を押さえられる。
どうやら押しつけられているのはタオルのようだ。
「な…、な、なんだよ！」
「だめだよ！　まだついているから、さっき滑り止めがついた手で顔触っただろう、顔が半分真っ白だぞ！」
「えっ…！」
「気をつけろよ～、そのまま出ていったら他の客や、インストラクター達に笑われるぞ！」
途端に怒りがこみ上げてきた。
いや…この怒りは先生にじゃなくて、自分にだったのかもしれない。

それ以上にもっと恥ずかしかったこともあるだろう。
ついさっきの気持ちより、わけわかんない気分になってきた。
「も～っ！　期待させてっ!!」
「は！」
突然のことにすっごく驚いた顔。その表情は兄貴と違った。
「ド・ン・カ・ン！」
抱えていたラケットを、思いっきりぶつけた。
それがどこにどうあたったかは知らない。
お兄ちゃんが…、あの人が何を叫んだかもわからない。
そのままシャワー室まで駆け込んだから…。
途中、大河原先生とすれ違った。
持っていたスポーツドリンクを一本引き抜いて走り去る。
なにか言ってたけど、それも聞こえなかった。
でも…、残った二人がどんな顔して、どんな会話してるのかなって思ったら、すっごく楽しくなった。

聖アンジェルス病院
ナースコール
Nurse Call

CandyStripe
アフレコ・レポート!!

◀左から草柳順子(織下育美役)、和田カヨ(園田栄美子役)、永見はるか(鵜飼希役)、長崎みなみ(森崎綾乃役)、清水香里(梶山潤役)、山本麻里安(大河原由紀役)。彼女たちの絶妙な演技力によって、ストーリーに惹き込まれること間違いなし!

5月21日アフレコスタート!

本誌イチオシのキャラクターゲーム「CandyStripe ～みならい天使～」のアフレコが早くもスタートしたぞ。コンプでおなじみの清水香里はもちろん、森崎綾乃役の長崎みなみ、大河原由紀役の山本麻里安を始め、今回紹介している全6名の声優陣が集結。経験豊かな声優陣だけに、息もぴったり! このアフレコがどうゲームに活かされているかは、ゲーム本編で確認してね。彼女たちが演じる聖アンジェルス病院に集うキャラクターたちのドラマを体感できるのも、もうすぐだぞ。

それぞれの声優がキャラについて、そして「CandyStripe」について語ってくれたことは下のコラムに掲載しているので読んでね!

Nagasaki Minami

長崎みなみ
as 森崎綾乃

看護婦さんにも准看護婦と正看護婦とは違いますし、いろいろ勉強もしなくちゃならないので、やりがいもあるけど大変だなーと思います。綾乃ちゃんが一生懸命頑張っている姿を演じたいと思います。この病院は、かわいい看護婦さんとかわいい患者さんがいるので男の人はウハウハですね。

Shimizu Kaori

清水香里
as 梶山潤

最初、看護婦さんの役って聞いたときに「やったー」という感じでした。今までは、ちょっと変わった役が多かったので、やっと普通の女の子が演じられます(笑)。明朗快活なところや人の話を早のみこみするところなど香里と似ている女の子なので、作らずにこのままの私で演じていきます!

Nagami Haruka

永見はるか
as 鵜飼希

看護婦さんの役は初めてなんですけど、明るい役なので、ずっとテンションを挙げていなくてはならないのが大変ですね。看護婦さんやお医者さんは大変なお仕事なのに親身に接してくれるので、とっても感謝しています。聖アンジェルス病院は美女ぞろいの病院なので、ぜひ見てください。

Wada Kayo

和田カヨ
as 園田栄美子

キャンディストライプのホームページで栄美子ちゃんの絵を見た印象はおとなしい&優しいでした。演じてみると、元気いっぱいでかわいい女の子ですよ。現実にCandyStripeという花があるのですが、この花の花言葉は、“家族を愛する”という意味だと覚えてください。

Kusayanagi Junko

草柳順子
as 織下郁美

患者さんの役なので、素敵な看護婦さんやお医者さんが優しくしてくれるのかな? 薄幸の美少女という設定はちょっとテレちゃいます。それに年齢が20歳なのも、あまり経験がないので子供っぽくなってしまわないか心配です。ドジな方もいらっしゃるので患者としてはちょっと不安です(笑)。

Yamamoto Maria

山本麻里安
as 大河原由紀

以前に看護婦さんの役は演じたことがあるのですが、こんっかいは研修医なので“ちょっと頭がいいのかな?”と思っていたらミスもするんですよね(笑)。ロマンの対象である眼鏡っ娘ということで、みなさんのイメージを損なわないようにがんばります。あなたもレッツゴー病院!(笑)

CandyStripe
公式ホームページも
見逃さないで!!

☞ http://www.wow-ent.co.jp/candystripe/

TOPページ

CandyStripeのすべてがココに!!

ワウ エンターテイメントが贈る「CandyStripe」の公式ホームページはもちろんチェックしてるよね？ 情報はもちろんデータ物も満載だぞ！

ダウンロード壁紙

ナースステーション

デモムービー

スクリーンセーバー

どんどん送ってね！

読者コーナー投稿ハガキ大募集!!

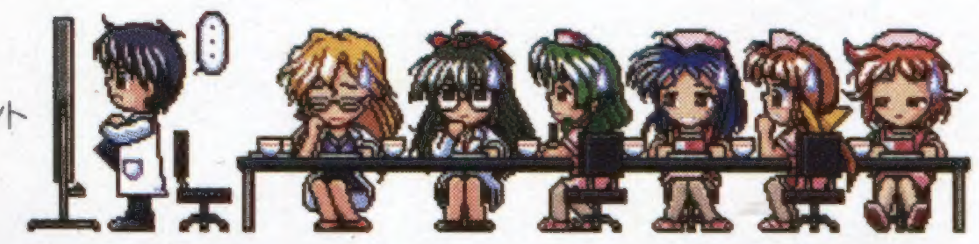
「CandyStripe」の本誌連載が次号よりスタート。このページの読者コーナー用投稿ハガキを募集しちゃいます!!

宛先:
〒102-8078
(株)角川書店
コンプティーク編集部
「CandyStripe
ナースコール係」

e-mail:
candy@comptiq.com

CandyStripe制作快調!!

● DC ● 恋愛AVG
● 今夏予定 ● 価格未定
● セガ／ワウ エンターテイメント



今夏の発売に向けて、制作は着々と進行しているぞ。イベントシーンも続々と上がっているし、チビキャラのアニメーションパターンもほぼ完成！ このチビキャラがゲームのどこで使われるかは続報を待ってね!!

コンプティーク7月号特別付録　CandyStripe キャラクターストーリーブック